

海外で活躍できる 開発コンサルタントとして

かとう きんいち
加藤 欣一

PMaCS 社(プロジェクトマネジメントコンサルティングサービス)会長

1945 年生まれ。1971 年パシフィックコンサルタンツ(株)入社。1980 年パシフィックコンサルタンツインターナショナル(PCI)に出向。以後海外の交通インフラ整備に従事。1986 年 PCI に転籍。2004 年同社常務取締役業務管理本部長。2009 年代表取締役副社長。2010 年 3 月より現職。

インタビュー日：2012 年 4 月 3 日

聞き手：加藤 隆、菊地良範、日比野直彦



学生時代から海外を夢見て

建設コンサルタントの道を歩んだきっかけは？

学生時代に建設コンサルタントでアルバイトをして道路設計のいろはに触れました。その頃、インドネシアの砂防プロジェクトの経験を記した日本人専門家の手記を読む機会があり、卒業研究として「インドネシアの道路設計」をテーマとしたいと考えました。そこで、その手記の筆者を訪ねていき、お話を伺ったところ、「卒業研究よりもまずインドネシアを旅行しての見聞を深めてくるのが良い」とアドバイスをもらいました。それで、実際にインドネシアを含めた東南アジア諸国を旅行し、旅行し、卒業後海外の道路設計に従事したいと考え、就職先として海外プロジェクトに強い

コンサルタント会社を選びました。

入社してからの経歴は？

1971 年に就職し、20 歳代は、主に国内の道路の設計に携わりました。思い出深いのは、沖縄縦貫道路のプロジェクトです。沖縄は当時返還直後で、海洋博までに 36km の高速道路を開通させる必要がありました。そこで、発注者も含めて優秀な人材が集まり、非常にタイトなスケジュールで設計を進めました。当時新人だった私も設計担当者として従事していましたが、その頃は発注者側の担当技術者が道路設計の進め方だけでなくいろいろメンタル面でも指導してくださり、仕事を進める上での師匠のような存在でした。

海外工事のプロマネとして

海外プロジェクトに従事してから

のことを教えてください

1980 年に初めての海外プロジェクトとして、インドネシア スラウェシ島の縦貫道路プロジェクトの担当になりました。現地で施工監理業務に従事して、まず思ったこととしては、海外工事の詳細設計図面は非常に簡易な図面であり、国内プロジェクトとは全く違うことを痛感させられました。海外では、若手でもプロジェクトマネージャーのような仕事を任せられ、常に同年代の社員よりも背伸びをしたような立場での業務の遂行が求められました。40 歳代に入ってから、プロジェクトマネージャーとして、トータルデザインも含めた総合道路建設プロジェクトに従事しました。50 歳代以降は本社の管理職となり、現場の指揮を執ることは少なくなりましたが、引き続き大型プロジェクト

委員会からのメッセージ

加藤欣一さんは、長期にわたって海外の道路プロジェクトなど交通インフラ整備の仕事に尽力されてきており、現役時代に海外で活躍された建設コンサルタントの技術者のトップランナーであり、現在もその経験を活かし、次の活躍の場を考えられていることから、インタビュー対象者にふさわしいと考えました。

トの陣頭指揮を執る機会はありませんでした。

次世代の技術者を育てたい

現在の職場を選んだきっかけは？

現在は、フィリピン法人のマネージメントコンサルタント会社でアドバイザーをしています。非常勤の会長職で、年間に60日～70日程度はフィリピンに出張する生活をしています。

この職を選んだきっかけとしては、60歳を超えたら、自分自身の人生をもっと活性化したいと考えようになったことです。建設コンサルタントとしてではなく、人材育成という今までとは違う業種で、技術者を育てることで、社会に還元したいと考えようになりました。

現在、コンサルタント業界では、設計業務の細分化が進み、総合技術力の低下が問題となっています。一方、開発途上国では要素技術よりも総合的なマネジメント力が求められています。

今の仕事を通じて日本の若手技術者に広い視野でものが考えもらえるよう、学び手の学習意欲を高めるよう取り組んでいます。

「1/3 分割法」を理想として

定年退職後の人生の進め方は？

定年退職後の生活の理想とは、「1/3 分割法」が理想であると考えています。これは、生活を1/3に分割し、1/3は全く自由な時間を過ごすこと、それからもう一つの1/3は自身の経験・ノウハウをボランティアとして社会に還元すること、また最後の1/3は、組織・企業に属して

緊張感のある時間を過ごすことを考えています。

現役時代にこのような「1/3 分割法」を実践することは無理でしょうが、少なくとも3割くらいは、仕事以外のことに取り組める余裕を持つようにすることが、定年退職後の充実した生活につながるものと考えます。

社会貢献を続けたい

定年退職後に必要なスキルは？

やはり過去の経験が重要であると考えます。経験を若手に伝達し、過去から現在を通じて未来を予測することが最も重要であると考えます。

また、プレゼンテーション能力を磨くことも大切であると考えます。人に伝える際には、情報を一方的に伝えることではなかなか伝わりません。相手の心をつかむキャッチフレーズを考えることが重要です。

今の仕事を何歳まで続けたいですか？

70歳までは、現在のスタイルで仕事を続けたいと考えています。それまでに、国内志向の強い日本のコンサルタントが海外で活躍するために、欧米型コンサルタントと対等に戦えるように若手技術者の研修を通じてこれまでお世話になった業界に貢献をしたいと考えています。

また、70歳を過ぎても、すぐに引退するというわけではなく、70～75歳においても、別の方法での社会貢献をしたいと考えています。

もっと早い時期から海外に

人生をやり直すとしたら、何がしたかったのですか？

若いころには、学校の先生やジャーナリストなど、文科系の職業につきたいと思っていましたが、志望する大学のキャンパスを見てから方向が変わり、技術系になりました。もう一度人生をやり直すとしたら、やはり開発コンサルタントになりたいと思いますが、その際は、早い時期から海外に留学して、海外でもっと活躍できる技術者になればいいな、と思います。

「第二幕」の生き方が大事

これから退職を迎える技術者諸氏へのメッセージ

人生は、定年退職してからの第二幕の生き方が大事であり、第二幕をどのように過ごすかが、自身の最終評価につながると考えます。

日頃から多面的に興味を持ちネットワークを広げている実践するよう心がければ人生第二幕を演出・エンジョイすることができるのではないかと思います。

(文責:加藤 隆)

インタビューを終えて (聞き手から)

加藤さんは、定年退職後の生活の理想として、「1/3 分割法」を持論とされていました。定年退職後の現在も年間60日程度は海外で過ごされており、自由な時間、社会貢献、組織への貢献をバランスよくこなされており、非常に充実した時間を過ごされているという印象を受けました。生まれ変わってもコンサルタントを志望し、その際はもっと早く海外留学する、とお話されたのが印象的で、海外プロジェクトの設計に深い思い入れを持たれていることに感銘を受けました。